

Paris, 1964.

(c) Bhattacharya, K.: Les Religions brahmaniques dans l'ancien Cambodge, Paris, 1961.

(4) Dupont, P.: La Statuaire Préangkorienne, Ascona, 1955.

K・R・ノーマン訳註

『テーラ・ガーター』

原 実

パーリ文、テーラ・ガーター (Thera-gāthā) は一八八三年にドイツの学者、オルデンバルク (H. Oldenberg) が校訂出版し、一八九九年、ノイマン (K. F. Neumann) のドイツ語訳、一九二三年、イギリスのパーリ学者、リス・デヴィッツ夫人 (C. A. F. Rhys Davids) の英訳するところとなった。続いて一九四〇—五九年の間にはダンマパーラ (Dhammapāla) の註釈、パラマッタ・ディパーニー (Paramattha-dīpani, Theragāthīḥaṭṭhā) がウッドワード (F. L. Woodward) の手によって三巻本としてロンドンより出版されるに及び、テーラ・ガーターの解釈に重要・不可欠な資料が提示せられるに到った。⁽³⁾ 本邦に於いても増永靈鳳、早島鏡

正両氏の努力によって邦訳され、夙に「長老偈経」「長老の詩」として知られて⁽⁴⁾いる。然るに戦後、中期インド・アリアン語の研究が大幅に進み、就中パーリ語韻律の詳細が漸次明らかとなるに及んで、⁽⁵⁾韻文で綴られたパーリ語の原典は韻律という新しい視点からの再検討を迫られ、屢々原典に手をつけて読み方を変更する文献学的操作の対象となった。そのため一九六六年に再版されたテーラ・ガーターの原典はその後二つの Appendix が付加され、ここに紹介するノーマンと、ハンブルクの碩学アルスドルフ (L. Alsdorf) は、夫々 Some Alternative Readings of Thera-gāthā (pp. 222-232) と Ārya stanzas in Thera-theri-gāthā (pp. 233-250) の二篇を執筆することとなった。⁽⁶⁾これより先、ドイツのリーダーズ (H. Lüders) は、パーリ文ダンマパダ (Dhammapada 法句経) と中央アジア出土梵文ウダーナ・ヴァルガ (Udanavarga) の原典を精密に比較研究して、両典籍の基礎にあり、元来は東部方言で伝えられていたと思われる仏教原典 (Uṭṭaran) の言語 (Arhamaṅgadhī, Alarhamaṅgadhī) が、もと西部印度に起源したパーリ語に及ぼした影響のいくつかを組織的に論じた。このリーダーズの研究は部分的に散逸し、その後ヴァルトシュミット (E. Waldschmidt) によって公刊されたものであるが、⁽⁷⁾パーリ語研究に画期的な業績であり、既述の韻律研究の発達と共に、近年のパーリ語研

究の方向を指差したものと言ひ得る。このパーリ研究の変革期に在って、既に久しく阿育王碑文に初まる中期インド・アリアン諸語、即ちブラークリットの音韻論、語彙研究に数多くの卓れた論稿を發表している当代屈指のブラークリット学者、ノーマンがその該博にして精緻な学殖を背景に、パーリ仏典テラ・ガターの英訳を詳細な註を付して世に贈った事は斯学の慶事であり、今後のパーリ研究に重要な指針を与えたものとして、本書の出版の意義は極めて大なるものがある。但し訳者ノーマンは唯単にその専門とするブラークリット語の知識を駆使してこのテクストを「言語学的」にのみ扱ったのではない。彼はテラ・ガターの註釈、パラマッタ・ディーパニーを時に必要以上と思われる程に引用し、バンコク、ラングーンその他から出版されたテラ・ガターの刊本、所謂 Oriental Editions を常に比較参照なし、パーリ及びサンスクリットの仏典の諸章句を随時引証しながら、パーリ「文献学者」として極めて慎重に一偲つつ翻譯を進めている。その意味でこの書は、古典の翻譯のあるべき模範的な姿を示していると言ふべく、その恩恵に浴する者はひとりパーリ研究者のみに限られない。

本書は序文、文献目錄、略号の説明、序論、翻譯、註記、平行類似句の索引、個有名詞の索引、註に言及・検討された語彙

の索引の九部分より構成されている。この中、序論 (pp. 19-20) は更に九節に細分されるが、その約三分の二は韻律研究に当てられ、韻律の種類の詳細と、韻律による母音の延長、短縮その他の諸問題が論ぜられる。本文一六頁には一二七九 (但し実際には一二二四 A B と分かれるから一二八〇) に亘る長老偈の英訳が載せられ、続く一一七頁より三〇〇頁、即ち英訳部を悠に凌ぐ約一八〇頁はこれら長老偈の殆んど一つ一つに亘る詳細な註記を盛っている。訳文の正確さと革新性もさることながら、その量からも察知せられるように、学問的に最も価値の高いものはむしろこの全体の半分以上を占める註記 (Notes) の部分である。

筆者はパーリ韻律の細目に必ずしも精通している者ではない。従つてその意味ではノーマンの研究の最高の発露を正しく評価する資格を欠いているが、同氏の註記を精読する間に多くのことを学んだので、以下にその一端を紹介することとする。

Thag. 27=233C *urasā panudhissāmi*

文脈に徴して動詞の形は元来 *panud (ah) issāmi* であつたに相違なく、一音節の減少は韻律に合致し、且つ一写本 (Be.) の支持を得る。オルデンベルクのテクストは *panudissāmi* と *padahissāmi* (Comm. *dvīḥa kaṭvā purato gamissāmi*) との混淆より生じた形を取つたものと思われる。斯くて全文

の訳は「孤独に身を委ね、ダルバ草その他の野草・雑草を胸もてかき分け行かん」となる。

Thag 32 yoga-khema (Skt. yoga-kṣema)

この合成語は通常「獲得と保存」詳しうは「戦時の侵略的略奪と平時の既得権確保」の義に解され、相違釈に取るのを常とするが (cf. L. Renou, "Études védiques," *Journal Asiatique* 1953, pp. 177-180, C. Caillat, *Candavejhiya* (Paris, 1971) p. 132) 仏典に屢々 nibhāna (涅槃) と同義に用いられる *ni* の部分に *hā* を依主釈に取り rest from exertion, peace from exertion と訳する。梵語文献に親しむ者には確かに新しい見解であるが、この新解釈はむしろ漢訳の「安穩」の訳に一致している。

Thag 74 thina-middha (Skt. styāna-middha)

漢訳仏典が睡眠(惰) 惰(沈) 睡(眠) と訳し、*hā* の部分に sloth and torpor と訳し、この合成語は通常相違釈に取るが、元来は會つて *hā* の指摘した通り依主釈合成語 *styāna* (*-m*) *iddha* (*< rddhi*) に取られるべきである (increase of sloth) 中間の *-m* は所謂 *sandhi*-consonant, hiatus-bridger であるが、後に忘れられ *middha* の語に固定した。

Thag 338 vanatho, 691 vanā nibhanam

vana と *hā* の語呂合わせ (pun) 即ち「森」と「渴望」

はバーリ文献に屢々現われる。註釈家の間では *vanatha* は *tanha* と訳され、又時に *vana-stha* と分解される。一方 *nibhana* (涅槃) は *nirāṇha-bhāva* (渴望なき状態) と訳釈される。尚、*hā* の語の *vānas* (Lat. *venus* *< *E. jenos* *→ *menos*) と関つては R. Hauschild, "Das Selbstob des somaberauchten Gottes Agni (RV. X. 119)," *Asiatica*, Festschrift F. Weller, Leipzig, 1954, p. 251 参照。

Thag 348 suddho suddhassa dāyādo putto buddhassa oraso

hā の部分に the cleansed heir of the cleansed と訳す。suddhassa を後続の buddhassa による形容詞と取り、*hā* の可能であるが、suddho suddhassa は *hā* の構文 *satya* *satyam* を想起させる。この種の構文に間つては H. Oertel, *Zum altindischen Ausdrucksverstärkungstypus satya* *satyam* "das Wahre des Wahren" = *die Quintessenz des Wahren*, (München 1937) 参照。

Thag 497 na pare vacanā coro (人は他人の言よりも誇人となるに非ず)。

この偈の *śāṭṭhā* 対応句 (Sibhāssa 4. 15) は *n'annassa vayanā core* となつてゐる事実から、バーリの元来の読みは *para-vacanā* であつたと思われる。然るに韻律の制限はその

第二音節を延長して *parā-vacanā* としたから、伝承の或る時期に *parā* が複数主格と意識され、更にそれが「梵語的に修正」されて *pare* の形を産んでしまったものと思われる。

Thag 511 *sirim hatthehi pādehi yo paṇameya...*

ノーメンは *uj* の *sirim* を *siram* の誤記と断定して、同時に PED. の *paṇameti* の誤 *dissimiss* を排して「手足と共に頭を垂れるであろう人」と訳し、この新訳は文脈に徴して自然であり、且つ同類の文献に屢々現われる *pañcāṅga-praṇāna* (両手足と頭の五部分を以てなす礼拝) に符合するといっている。尚、その後半に出る *arādh*、*virādh* の対照は「得失」のそれではなく *honour*, *worship* を *transgress*, *sin* の *ひるがへし* といふこと (cf. C. Caillat, *Candavejhiya*, p. 126, note ad 97).

Thag 546 *cando pannaraso yathā*

通常「十五夜の月の如く」と訳られるが、*pannarasa* に形容詞の意味はないから、それは *pannarase* か或いは *pannarasi* と読まれねばならない。恐らくこの原典へ読みはこの偏が或る東部方言より翻案された時に生じたもので、元来は *cande pannarase* とあったものに相違ない。先行語は主格、後行語は於格であったものが、後に各々の由来が忘れられて現在の形となったといふのである (like the moon on the fifteenth day, Norman)。

Thag 634 *unnāḷa*

ノーメンはこれに二心 “frivolous” の訳を当てているが、註記と言及する如くこれには J. Brough の研究 (The Gaṇḍhārī Dharmapada pp. 279-280) があつて従うれば *unnāḷa*, *un-nīṭa* への導出を認めたが、Brough はむしろ *un-nīṭu* (cf. **vir-tu*, Lat. *virtus*) からの導出可能性を指摘し、この語が元来「武人 (nī) の逆上・狂乱」を示す形容詞であり、それより *nīṭ*, *nīṭu* の義 (戦舞→舞踊一般) に展開したものであると考えた。

Thag 743 *uccāvacch' upāyehi paresam abhiḥḡisatū*

ノーメンはオルチンベントンの註にみえる異説 *abhiḥḡisatū* を採用し *abhiḥḡisatū* を斥けるのみならず、註釈家がこれを行頭の求欲法と取るのを斥けて *jayatū* に由来するものと考えた。而して *jayatū* は人と物の二つの目的格を取る (cf. *Kaśikā* ad Pāṇini 1. 4. 51) から *pare* と *saṃ* 分立して「他人よりその財産 (Skt. *sva*) を奪わんとす」と訳出している。

Thag 788 *duma-pphalanīva patanti manava* (人間は木の葉の落ちる如く、朽ち果てる)。

ブラークリット語の子音同化現象の实例より *-p-ph-* が *-pph-* となる事が立証されているから、テキストの元来の読みは *duman*, *phalanī* であつたことが想定される。而して *-p-*

に終る単数奪格は又屢々プラークリットにみえるところであるから (H. Lüders, *Beobachtungen*, §§ 188-195) 其の部分はむしろ「木から果実が落ちるようだ」と訳し得ることなる。

Thag. 822

轉法輪王と記される cakka-vatī (Skt. cakra-varīn) は從來多くの見解が出たところ (最近のその一例を J. Gonda, *Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View* (Leiden, 1966) pp. 123-128) が、ノーメンは Pkt. cakkin, Jaina Skt. cakrin, Pkt. addha-cakka-vatī, Skt. ardhha-cakravartin, ardhha-cakrin の存在より、むしろローマの諸形が Skt. cakra-vāta, cakravāda, Cakravāla と結びつて可能性を指示するの語は「cakra-vāta の支配者」即ち海から海まで広がる国土 (cakra) を囲む地 (vāta, enclosure) とはす「霸王」の義と取る vit (転) なる派生を必しも採らざる。

Thag. 889 udicca

「北方」と「高貴」の両義を兼ねる形容詞 (cf. *uttara* in *Uttara-kuru*) udicca は註釈家により *udita* と結びつけられ、近代の学者がこれを形容詞的に用いられた絶対対の形 (*uditya*) と考へつつ (L. B. Horner “rising to”) が、同類の形容詞 *dākṣiṇātya* (南方) 及び *pāścātya* (西方) 及び *pauras-tya*

(東方) の形成にみえる接尾辞 *-tya* の機能、並びに *pa-* 語 *adhicaka* (<Skt. adhi-tya-ka), *upacaka* (<Skt. upa-tya-kā) とみえる *pa-* 接尾辞 *-cca* (<Skt. -tya “in der durch das Adv. bezeichneten Ortlage befindlich,” J. Wackernagel, *Altindische Grammatik* II, 2, p. 697) の存在より、其の *udicca* を Skt. **ud-i-tya* なる導出するものが可能でなつてゐる。尚、*adhica* を同様、**adhi-tya* より導出する時、それは「より上」超越的なものと見出される——由来するの義とより *adhica-samuppanna* の語義 (arisen without a cause, spontaneous, unconditioned) とを合致する如く思はれる。然る時、通常「縁起」「縁生」の *pa-* 語 *paticca-samuppanna* の元來は **prati-tya-samutpanna* 即ち「相対時」であるに従つ、それに由来して生起する (dependent origination) より導出されるものとなるであらうが、この問題は尚検討を要するであらう。

Thag 1210 *apalāyinaṃ*

訳文に於いてノーメンはこれを複数属格に取り、先行の *saḥassam* と結びつけているが、註記に在って別の解釈の可能性を提示している。文脈を考慮に入れる時この語は *apalāyinaṃ* と分ちることが可能で「(そのような場合には) 勿論 (*nam*, emphatic particle cf. Edgerton *BHSD*, s.v., T.R. Chopra, *Kuṣa-jātaka*, 1966, p. 87, note 1) 私に述べた

(past tense of *paṭayati*)」と説出するところをとり不能にせむ。

Thag. 1244 so desayi dasaddhānam

リス・デヤイ・マン 夫人は dasaddhānam を「知見の道 (path of sight, vantage point of sight)」と訳し、目的格に取ったが、この解釈は註釈家の支持を得ていない。註釈家はむしろこれを pañca-vaggiyānam (五の属格) と取り、仏典にも同類の教訓表示法 (cf. dasaddha, chaḍ-āddha, aṭṭh-āddha) がみられるから、この部分は「彼は十の半分、即ち五人に説けり」と訳出するべきであるとみる。

一切の印刷刊行された書籍は常に誤植、誤記を免れない。従ってそれらをあげつらう意志はさらにないが、筆者の眼に触れたもののみ以下に列挙する。

- p. 84 (888) byond, *beyond*
- p. 116 (1271) inviduals, *individuals*
- p. 245 (line 5) For pāsādikā see the note on 427, 432
- p. 278 (line 14) Alsdorf (1955, pp. 16ff), pp. 21ff.
- p. 289 (line 6) Dīdha, *Dyāḍha*

註記語のノートには W. Geiger, H. Jacobi, H. Smith, L. Alsdorf などの他の多くの研究文献の言及がみられるが、その

中でも特に前記の H. Elders, Beobachtungen zu J. Brough, Gandhari Dharmapada (London, 1962), F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar (New Haven, 1963) を眼を惹く。文中屢々 PED (The Pali Text Society's Pali-English Dictionary ed. by T. W. Rhys Davids and W. Stede, Chipstead, Surrey, 1925) を批判し、又時々 CPD (A Critical Pali Dictionary begun by V. Trenckner, Copenhagen, 1924) を訂正するが、同氏は自ら過去に犯した誤り (Appendix I) も亦認めるに吝かでない。同氏は目下 PED の改訂増広版を準備していると聞くが、それが刊行された暁には更に多くの新機軸が打ち出されるに相違ない。

これを要するに本書は従来の研究史をふまえて将来のパーリ研究が如何にあるべきかを示した名著と称し得る。それによって我々はパーリ研究に尚未だ龐大な研究領域の残されていることを改めて知ることが出来る。斯くしてパーリ語は唯単に原始仏教聖典語としてではなく、中期インダ・マリアン語の重要な一環としてより広い視野から今後研究されねばならぬとせむ。

(The Elders' Verses I, Theragāthā, Translated with an introduction and notes by K. R. Norman, (Pali Text Society Translation Series No. 38), London, Published for the Pali Text Society by Luzac and Company, Limited,

1969, lxiiv, 319 pp.)

註

- (1) K. E. Neumann, *Lieder der Mönche und Nonnen* (Berlin, 1899)
- (2) C. A. F. Rhys Davids, *Psalms of the Brethren* (London, 1913)
- (3) F. L. Woodward, *Paramitzīha-dīpaṃ*, Theragāthā-
aṭṭhakathā, 3 volumes (London, 1940, 1952, 1959).
- (4) 増永鑑鳳「長老偈経」(南云大藏経) 25所収、昭和十一年
- 早稲田「東洋学雑誌」(世界古典文学全集・5) 10頁、1
所収、筑摩書房、昭和四十一年)
- (5) 例へば A.K. Warder, *Pali Metre*, (London, 1967)
- (6) Cf. W.B. Bollee's Review, *Thera-and Thert-gatha*,
edited by Hermann Oldenberg and Richard Pischel,
second edition with appendices by K. R. Norman and
L. Alsdorf (Indo-iranian Journal XI, 1969 pp. 146-149.)
- (7) H. Lüders, *Beobachtungen über die Sprache des
buddhistischen Uṭkanons*. Aus dem Nachlass heraus-
gegeben von E. Waldschmidt (Berlin, 1954).
- (8) 最近のペーリ語研究を概観したのである。その中
子には誤りがある。

C. Caillat, *Pour une nouvelle Grammaire du Pali*
(Torino, 1970).

- (9) 1. Sampprasāraṇa in Middle Indo-Aryan, JRAS 1958,
44-50.
2. Some absolutive forms in Archa-Māgadhī, IJ II,
311-5.
3. Middle Indo-Aryan Studies (I), JOI (Baroda), IX,
268-73.
4. Some vowel values in Middle Indo-Aryan, Ind.
Ling. XXI, 104-7.
5. MIA Studies II, JOI (B), X, 348-52.
6. MIA Studies III, JOI (B), XI, 322-7.
7. MIA Studies IV, JOI (B), XIII, 208-13.
8. MIA Studies V, JOI (B), XV, 113-7.
9. Notes on the Aśokan Rock Edicts, IJ X, 160-70.
10. Notes on some deśi words, Ind. Ling. XXVII, 74-
78.
11. Voicing and unvoicing of consonants in Pali, Ind.
Ling. XVI, 132-6.
12. Notes on Aśoka's Fifth Pillar Edict, JRAS 1967,
26-32.
13. MIA Studies VI, JOI (B), XVI, 113-9.

14. MIA Studies VII, JOI (B), XVIII, 225-31.
15. Some aspects of the phonology of the Prakrit underlying the Aśokan inscriptions, BSOAS XXXIII, 132-43.
16. Notes on the Bahapur version of Aśoka's minor rock edict, JRAS 1971, 41-3.
17. Notes on the Gāndhārī Dharmapada, Ind. Ling. XXXII, 213-20.
18. MIA Studies VIII, JOI (B), XX, 329-36.
19. Lexical variation in the Aśokan inscriptions, TPS 1970, 121-36.
20. Notes on the Greek version of Aśoka's Twelfth and Thirteenth rock edicts, JRAS 1972, 111-18.
21. MIA Studies IX, JOI (B), XXI, 331-5.

マクリンデル編訳『メガステネス及び
アリアノスに記されているインド』の
複印

横 一 雄

John Watson McCrindle, 1825-1913) 2

「マクリンデルの著書『メガステネスの記述（一八九七年）』のなかで、古代インドの歴史や地理の記述や説話について詳細な研究がなされている。」

(1) Ancient India as described by Megasthenes and Arrian, being a translation of the fragments of the Indike of Megasthenes collected by Dr. Schwanbeck, and of the first part of the Indika of Arrian by J. W. McCrindle, M.A., Principal of the Government College, Patna, Member of the General Council of the University of Edinburgh, Fellow of the University of Calcutta, with Introduction, Notes, and Map of Ancient India. Reprinted (with additions) from the "Indian Antiquary," 1876-77. Calcutta: Thacker, Spink & Co., Bombay: Thacker & Co., London: Trübner & Co., 1877, pp. XI+223. With a map. (2nd ed., Calcutta: Chucker-very, Chatterjee & Co., Ltd., 1926, pp. XIII+227, With a map. (*Reprint of the 2nd ed. (?) by R. C. Majumdar in 1960, 米馬).

(2) *The Commerce and Navigation of the Erythraean Sea, Being a translation of the Periplus Maris Erythraei, etc. 1879. (米馬)